

後漢とローマ帝国を結んだシルクロード

漢王朝が再興し、西域支配にも乗り出す

25年、新の王莽を倒した光武帝によって再び漢王朝(後漢)が建てられた。光武帝は外戚や宦官の力を抑制し、儒教による政治を推進した。

1世紀末、後漢は外征に力を入れ、西域都護として班超を派遣して匈奴を討伐し、西域支配にあたらせた。

中国と西アジア、地中海地方を結ぶ「オアシスの道」は、中央アジアに点在するオアシスの都市を経由し、ローマで珍重された中国の絹を運ぶ重要ルートであったためシルクロードとよばれるようになった。シルクロードは、前漢の武帝の西域進出、後漢の西域支配などを通じて次第に整備され、東から絹や工芸品、西からは宝石、ガラス器、貴金属などが運ばれる東西文明の交流における幹線となった。仏教(35参照)、ゾロアスター教、ネストリウス派キリスト教もこのルートを通じて伝播している。

東西両大国が互いに使者を送り合う交流が生まれる

西域支配にあたった班超は西域の50余国を服属させ、シルクロードの大部分を制するとともに、部下の甘英を大秦国(ローマ帝国)に送った。甘英はローマにいたら

なかったものの、西アジアの事情が中国に伝わることになった。

一方、当時最盛期を迎えていたローマ帝国(P30参照)からも漢への使者が送られ、166年、ローマ帝国の皇帝マルクス・アウレリウス(中国名では安敦)の使者が海路で後漢の版図となっていた日南(ベトナム中部)に達している。ローマ帝国が東方の物品を求めることにより海上交易が活発となったと考えられ、ローマ帝国の金貨がアジア各地で出土している。

東西貿易の拠点 オアシスの都市

中央アジアの高山地帯のふもとには、各地に雪どけ水をたたえるオアシスがあり、灌漑による農業が行われたほか、東西の交易の重要な拠点ともなっていた。このオアシス地帯には、西方からイラン系のソグド人が移住し、オアシスの道の要所、サマルカンドを中心に、各地域に都市国家を形成した。一方、家畜を放牧しつつ各地を移動しながら生活する遊牧民は、騎馬戦用の武器や馬具に優れ、強大な軍力をもつが、十分な食料を得られなかった。そこで、オアシスの都市国家と結びつき、のちに経済力と軍力をもつ遊牧民国家が登場することになった。



王莽に滅ぼされた漢だが、光武帝によって復活する。漢の西域進出によって東西世界の交流がさかんとする。

東西を結ぶシルクロード

1~3世紀のシルクロード

